

火星

平成二十六年十一月号



七曜抄
(八)

山尾玉藻

風向きというがう麗し花野ゆく

父何やら言うて秋の蚊払ひけり

全き灯を点されにけり栗の虫

へうたんのくびれに届く風呂明り

鳥影のつぶてに鳴りし大豆畑

翡翠の俏^{ざう}しに水の澄みにけり

秋風をまとひ雀を齧る貌
伏見

茸山女ざかりの声が呼ぶ

赤銅の月上がりゐる茸山

人は影濃く引き秋の敦賀駅

太白星

炎 昼 の 力 石 て ふ 石 三 つ
炎 昼 の 潮 待 ち 茶 屋 の 椅 子 暗 し
背 の 順 に 子 ど も 輿 の 出 発 す
露 天 湯 を の ぞ い て ゆ き し 夏 つ ば め
花 火 昇 り 切 っ て 弦 月 隠 し け り
夏 帽 子 押 さ へ 観 潮 船 に 乗 る
盆 明 け の 寝 ぐ せ の 髪 の 跳 ね て を り

杉浦典子

浜口高子

よんべ鱧食うべしあとは忘れたり
闇に浮くちちははの家鉦叩
紙漉きの音冴え冴えと魂迎
浅間嶺の煙あはあは走り蕎麦
山裾の灯がひとつ盆の橋
すいとんの団子に芯や台風来
鳥渡る舳に揃へ大きい靴

火星作品

山尾玉藻選

人声のせぬ家ばかり蕎麦の花
宝塚山田美恵子

月も日も水晶色や鴝の贄

今結びし竹垣くぐるかまどうま

秋の日をちりばめ砂の水くらげ

青瓢守ともならむ昼の酒

扁額の文字落ちさうな暑さかな
八幡坂口夫佐子

空櫃に四つの隅ある土用照

記帳の背まるし八月十五日

今朝秋の湖岸に干せる樽の数

新涼やをどり出でたる軒雀

かなかなや眼帯の夫戻り来し
大山文子

盆路のそのまま海へ傾れけり

八朔の風孕みくるワンピース

河馬の背の泥乾きぬる厄日かな
その人の死を諾へず草の花
量り売る酒のあいまい踊唄
川渡し待つ花火師の素面なる
秋たつや鳳凰堂に洲浜あり
盆波のこらへて寄する舟屋かな
聞こえても聞こえなくとも生身魂
旋盤の金屑にほふ星月夜
夜の秋の岩牡蠣の汁白濁す
秋潮の浮標の下の昏さかな
機の辺のふ厚き眼鏡秋収
かりそめの能登の塩振るふかし
先頭の男踊りが夜を繋ぐ
川風に湯屋よろづ屋の施餓鬼幡
神鏡閉ざしうすばかげろふの杜
つくつくし鞍馬連山ひとつにし
校庭に日照雨の匂ふ終戦日

神戸深澤鱧

宝塚山本耀子

高松由利子

選のあとに

山尾 玉藻

芋虫の青き弾力糞こぼす 山本 耀子

丸々とした芋虫が糞を零した一瞬を切り取った。芋虫が緑の柔らかな身を波打たせて力んだ態を「青き弾力」と言い留めて見事である。常に興味津々の眼を働かせるたまもの。

港まで色変へぬ松秋まつり 山田美恵子

港へ続く松並木を煌びやかな山車か屋台が賑やかに練つているのだろう。何事にも動じない威厳ある存在の「色変へぬ松」と華やかで躍動的な祭りが融合する極めて日本的景。

てのひらの柚子のもつとも晴れてをり 蘭定かず子

掌にたった一つのせられた柚子には全く翳りが無い。それを切り取り、事もなげに「もつとも晴れてをり」と断定する。このストリートさがいよいよ柚子の存在を際立たせる。

書割のまんまでありしけふの月 深澤 鱧

書割の月とは舞台の背景の月のこと、現実の満月をなぞつたもの。それを逆手にとり、実際に仰いだ月が書割のそれと寸分違わず美しい、とぬけぬけと言って見せて諧謔味十分。

手品師の虚空より挽ぐりんごかな 河崎 尚子

手品師の手が宙を掴んだと思つた瞬間、その手から真つ赤な林檎が現れた。「虚空より挽ぐ」の措辞により、読み手は

手品師の軽妙な仕草を目の当りにする爽やかな一句。

池の面の柿に浮力のありにけり 小林 成子

固体として存在するものには全て浮力があるが、作者は敢えて「柿に浮力がある」と驚いている。清澄な秋の水の上に浮く鮮やかな色の柿を改めて新鮮なものと思えたからである。

葦原に朝行き渡る帰燕かな 大山 文子

宇治川向島は帰燕を前にした無数の燕たちの渡りの基地。中七の張った表現により、夜明けの気配に燕たちが静かに色めき立つ様子が伝わってくる。いよいよ帰る日が来たのか。

鳥籠のからつぽ二学期始まりぬ 藤田 素子

無論籠には鳥が飼われていたのだろうが、何かの事情で今は空っぽ。そして二学期。季節の推移を鳥籠で具現し、後は何も語らない。俳句形式の強みをよく心得た一句である。

二百十日大きな音の日照雨 坂口夫佐子

日照雨とはいえかなり大粒の雨が降り出したのだ。日差しの中の大きな雨音にはそれなりの気の張りが感じられ、そこに「二百十日」に対する作者の意識が見て取れるだろう。

バイオリンの工房匂ふ暮の秋 西村 節子

匂い立ったのは白木の香であろう。バイオリンの形態の流麗さや気品さがそう思わせるのだろう。しかし何よりも「暮の秋」に託す作者の秋を惜しむ気持ちこそそれを語っている。
〈以下略〉

恒星圈

高松由利子

蝸の磴くろがねに湿りぬし
床の子が母を眼で追ふ野分雲
存分に鳴きて手にある法師蟬
枝はらひ月に触れたる杉木立
湖へ向く千の仏の夜長かな

垣岡暎子

田中文治

夾竹桃の白より雨の上りたる
夏痩せてみたしと胸の豊かなる
電工の腰につけたる蚊遣香
七夕笹荷台はみ出し運ばるる
旅鞆へくそかづらの坂のぼる

薬師寺のもどりや稲の花明り
秋簾とぎれとぎれの風の音
葛の葉や溪より巖そびえ立つ
白雲の峰より秋の立ちにけり
老猫と寝て見てゐたり鱗雲

高尾豊子

戸田春月

神域の蟬の骸につまづきし
新松子石の鳥居のもうひとつ
秋の蚊や二礼二拍手一礼す
大雨のあとの茅の輪をくぐりけり
のら猫の尻尾に触れし茅の輪かな

絵を貼りて罷注意の登山口
帰省子の武勇伝聞く耳八つ
定宿の博多にありし竹夫人
盆の波古き話に河童出て
みんなみの空奪ひあふ揚花火

獅子座

山尾玉藻推薦

藤田素子

生身魂オーブンカフェの隅つこにはつあきや文庫カバーの革匂ふ母の手を探る子の手や盆の風秋扇細木数子の話など

涼野海音

西村節子

牛乳を嚙んで飲みをり終戦日一斉に顔の傾く踊かな菊枕いつしか止みし朝の雨吊革にかすかな温み十三夜

診察の声の洩れくる秋暑かなももいろの一膳飯屋の芋茎かな桔梗を括りし膝の濡れぬたり耳澄ましけり深吉野の天の川

林 範 昭

助 口 も も

はるかより波ふくらみ来稻の花ジンジャーの花や月明烟らする税関に国旗はためく秋の潮干し棹に浮輪の下がる送り南風

一服の茶を洩れたのし盆用意草市のバケツのものに雨あがるあの頃は何にもなくて茄子の花斜に抜け来し公園の蟬時雨

石井 耿 太

今 澤 淑 子

蓑虫の不意の念仏踊りかなおもろうてやがてもどりの虫の闇黴に棲む者ら健やか吉田寮恙なく紅さし戻る盆三日

朝顔や夫の端書きこころ安露けしや万年筆を閉ぢし音露けしや白ソックスの透かし編みあるか無き風もて門火焚きにけり